市原市古都辺
秋葉　平家文書

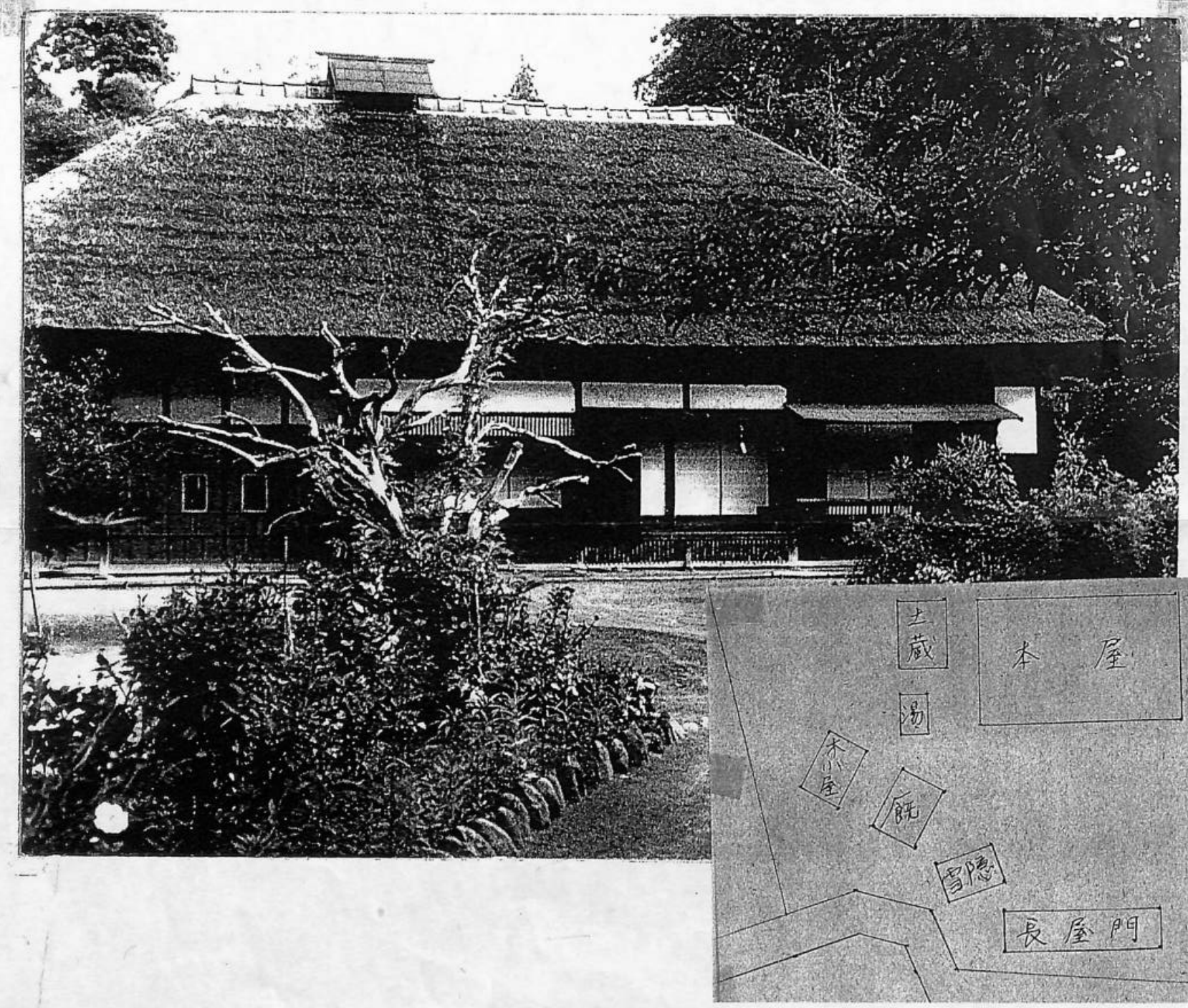
明治10年ころ古都辺村番地字訳図
天保9年　　離別去状(三行半)ほか

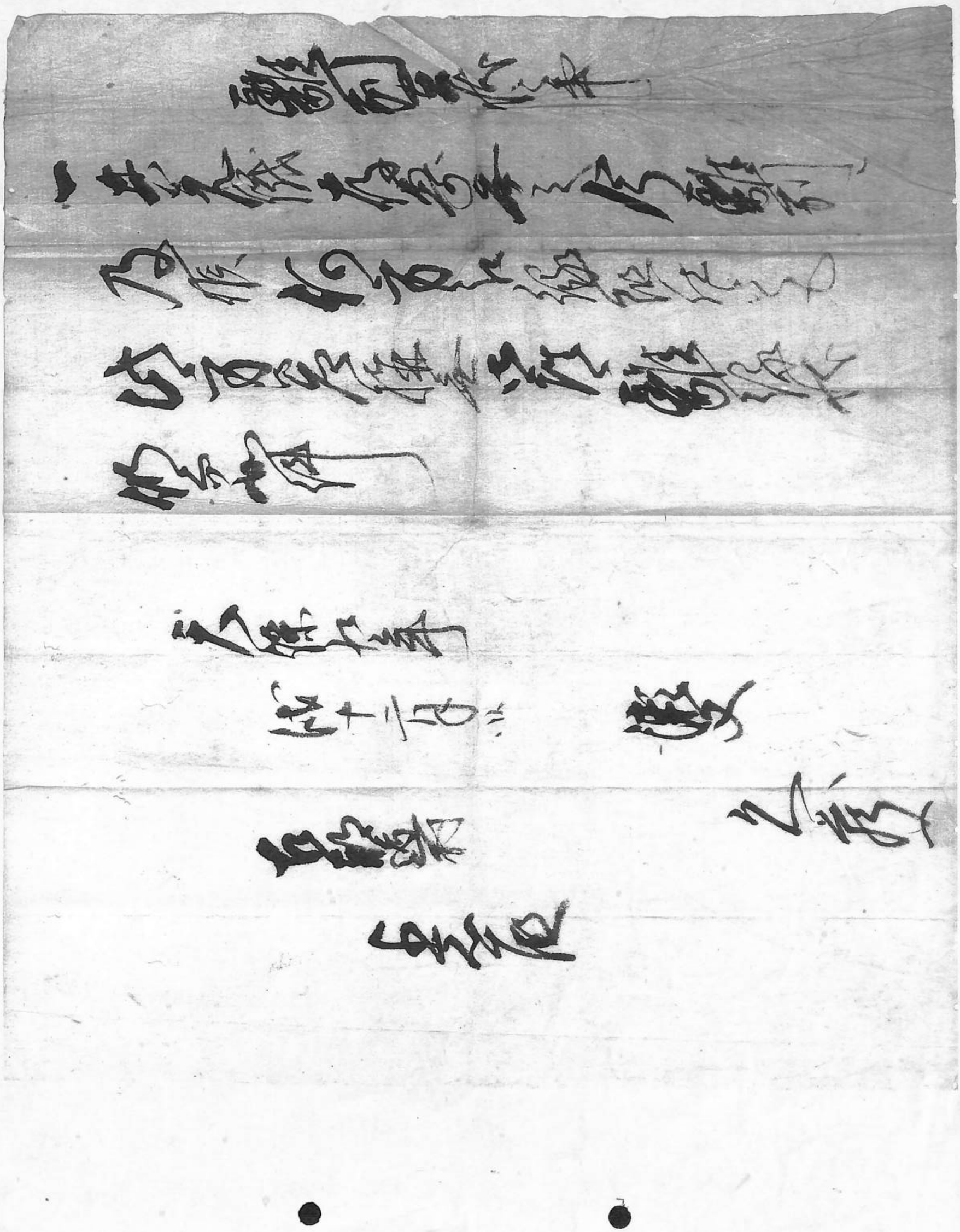
市原の古文書研究第8集の一部

令和4年　補遺

八幡史学館

昭和50年頃





1.851
（嘉永四年）

安政四年二月廿六日

嘉永六丑年

（不更申貝淵藩）→（請西藩）

嘉永六丑年

「郷足軽を仰付ける」との
仕命書である
貝淵藩の人員補充の為と
思われる（緊急措置）

郷足軽

仰付

陳時の為

沖国

仰付

第二組

組

金成国

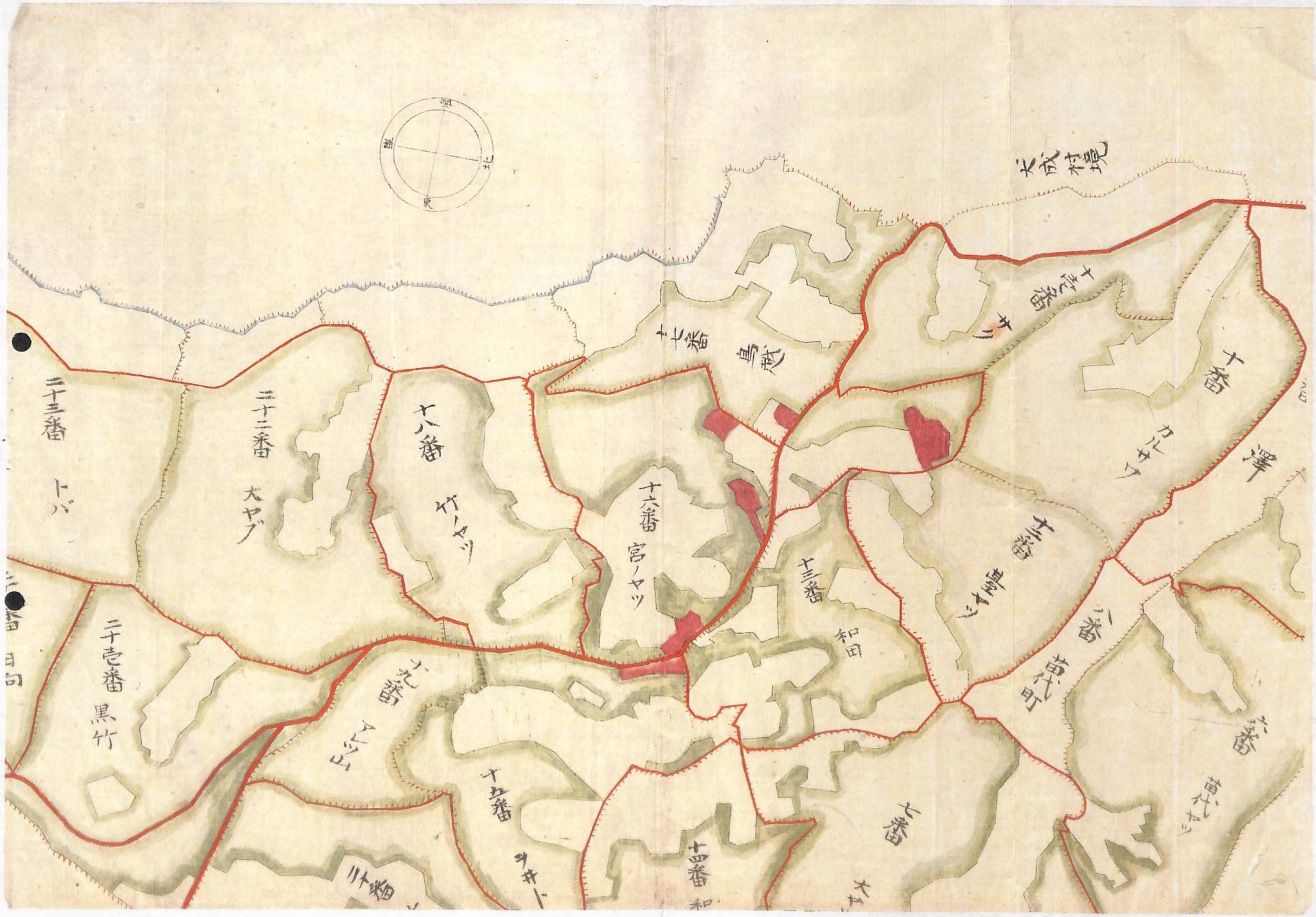
田村

三十番 深サク
二十八番 大サク
二十七番 ザツキ子
二十六番 ゼヤツ
二十五番 イザ沢
二十四番 日向
二十三番 トバ
二十二番 大ヤブ
二十一番 黒竹
十八番 ゲンヤツ
十七番 ムヒヤ
十六番 宮ヤツ
十五番 ヤキト
十四番 高
十三番 船田
十二番 ヤブ
十番 コヒヤツ
九番 ヤ
八番 ヒヤ
七番 大ムジ
六番 黒ヒヤ
五番 小マツ
四番 大ヨウ

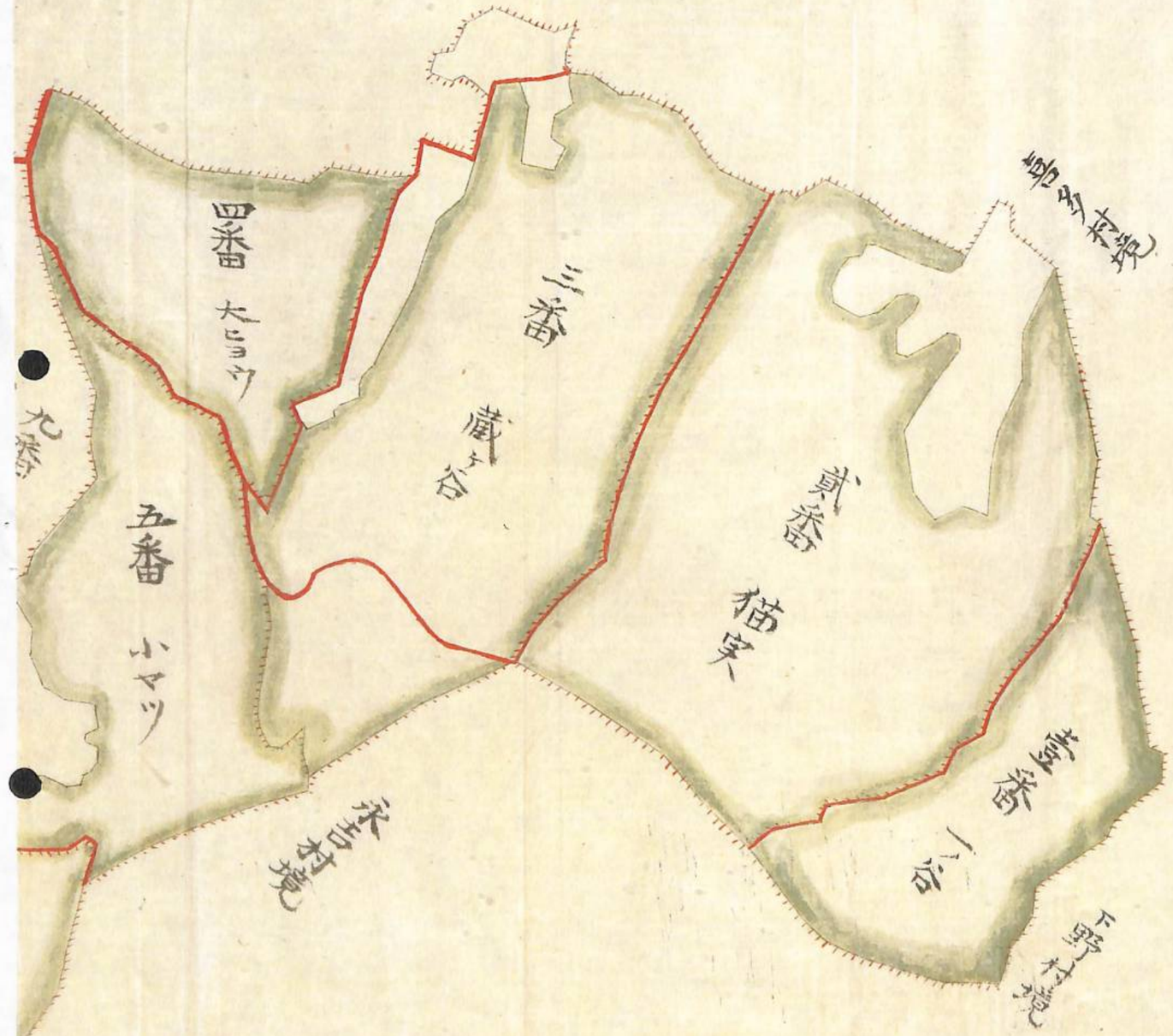
明治廿年 [illegible] 字切図 [illegible]

古都邑村

田畑宅地
山林野地
社寺境内墓所
水
道
字境


北
東
十番
十一番
十二番
十三番
十四番
十五番
十六番
宮ノヤツ
十七番
十八番
十九番
二十番
二十一番
二十二番
二十三番
二十壱番
黒竹
大ヤブ
和田
七番
六番

古郡邊村



○ 田畑宅地
● 山林野地
● 社寺境内并墓所
● 水
道
字境

中野播磨守宗行奉書ト

御判岩本

相州ト

寛元二年辰十月廿

知懸事栗山文兵衛尉

新二郎

日付

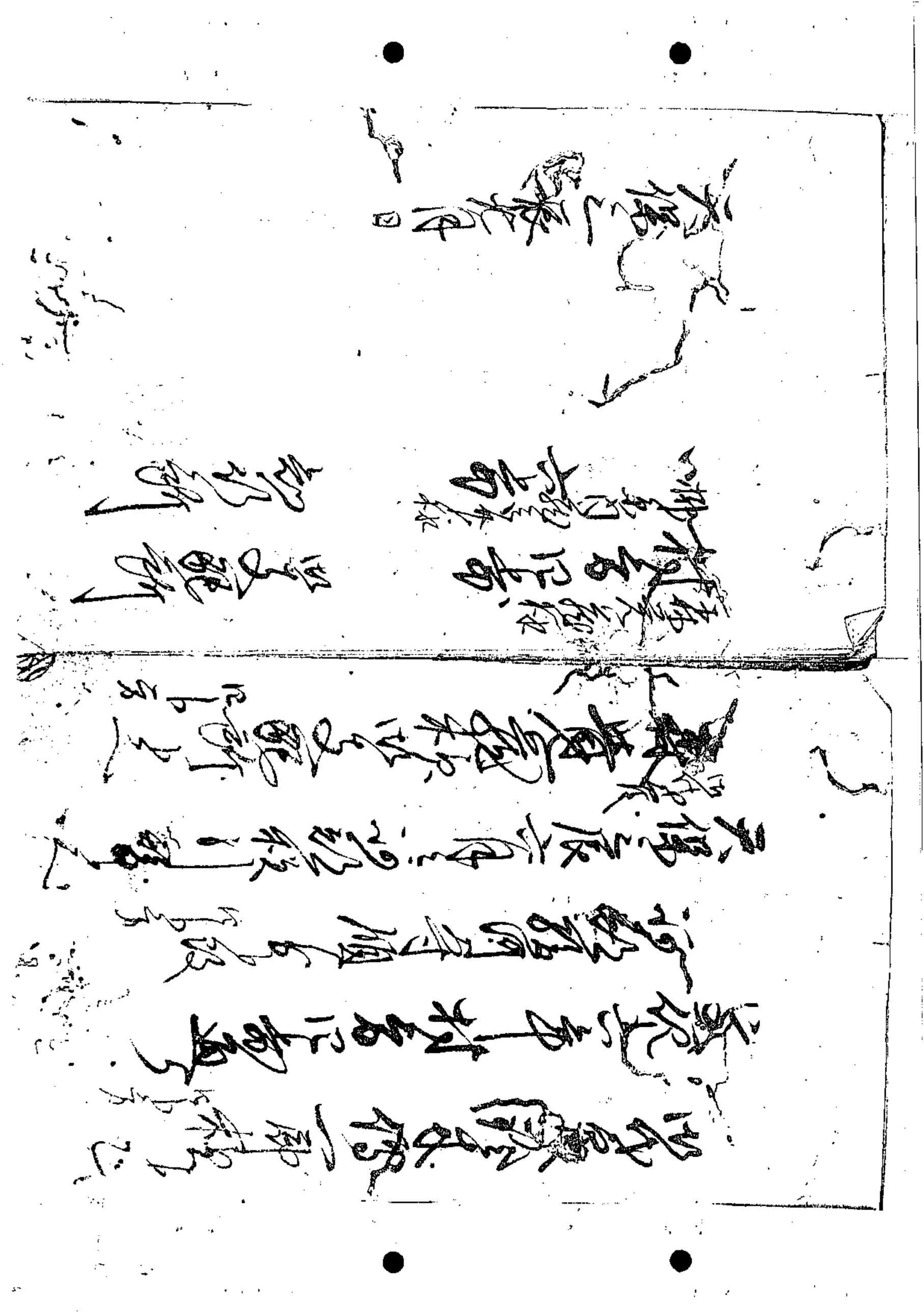
水野出羽守忠清

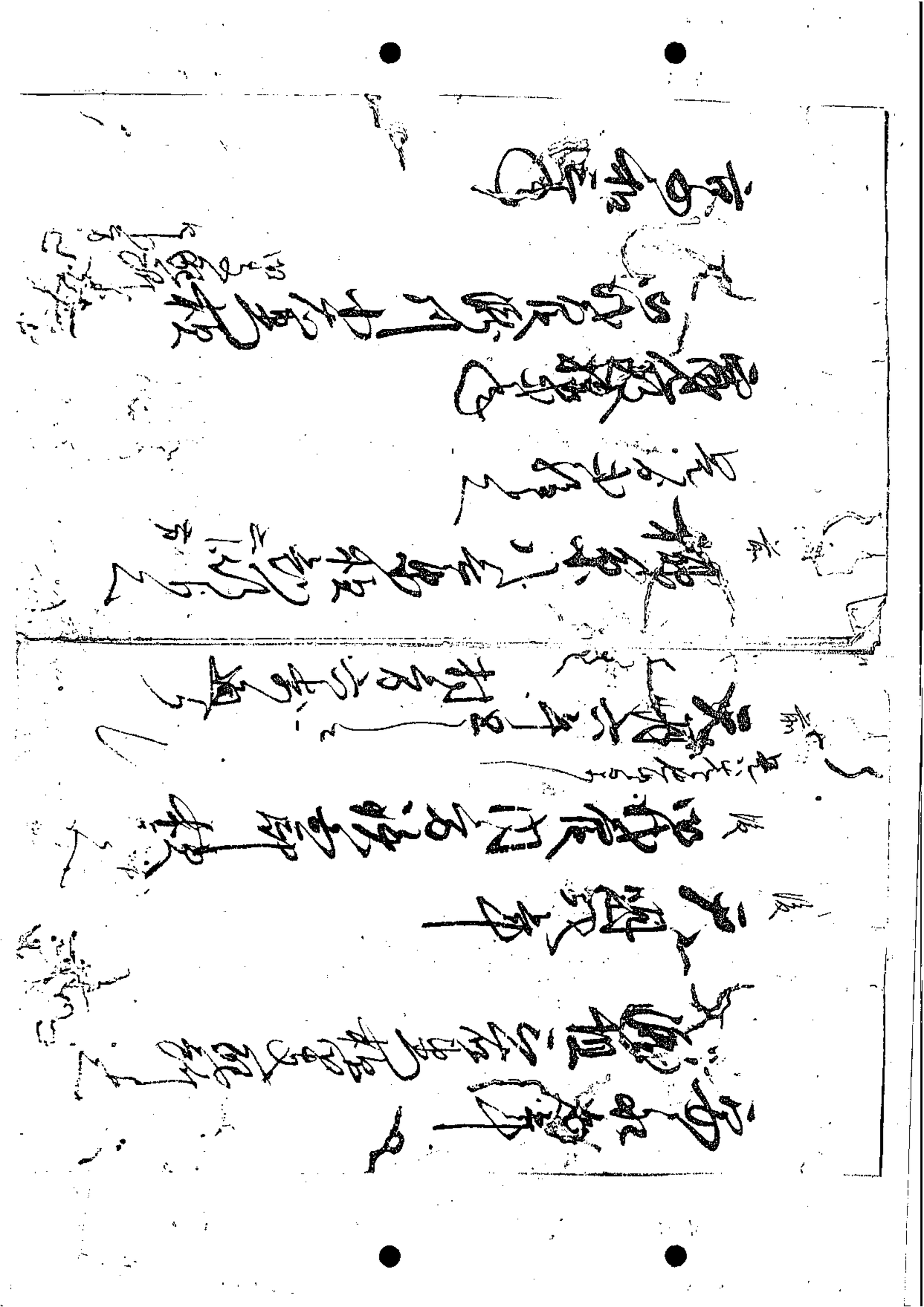
鉄沼龍昌寺文書
現文数通ということ
コピー所有者
〒290-0035
千葉県市原市松ヶ島二二四
齋藤廣
電話〇四三六-二一-二五六三

[illegible]

[illegible]

[illegible]





[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]七万[illegible]石之内

米[illegible]

[illegible]

[illegible]

天正十年[illegible]月十日[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]年[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天正八年

四段雲形蒔絵

辰閏十二月吉日

55.11.2

飯沼・龍昌寺文書（原本散逸＝斉藤廣様コピー所蔵）
＝天保３年（１８３２）十後筆

天正八年（１５８０）
御改め松ケ嶋村始まり帳
辰四月十三日改め

新田切り立て開発人
飯沼村出　斉藤庄之介
同　国吉伝三郎
これより三人は浪人、岩見者と申すなり
同　戸田丹治
同　田中六太夫
永井平馬
斉藤七兵衛
磯谷庄五郎
森　平吉
国橋五郎兵衛

切り立て長百姓九人

領主
御高七万二千七百石余
長南式部大輔様　内一口（磨か）　田永治郎
河口善太夫

天正十二申年三月より十二月九日までに
領主の御蔵立つ

文禄四未年（１５９６）十月三日
酒井熊太郎様知行所なり

慶長七寅（１６０２）二月十四日
御代官岡部治右衛門様となり

同十五戌（１６１０）九月十七日に
御代官飯田吉左衛門様となり

元和七酉年（１６２１）八月十二日に
神尾宮内少輔様知行所となり

正保元申年（１６４４）十月二十四日
神尾政右衛門様と御改めになり

慶安二丑年（１６４９）に
御代官天羽七右衛門様となり

宝暦十三年（１７６３）
御代官吉田源之介様となり

明和八年（１７７１）
御代官所伊名（奈）半左衛門様となり

安永口（虫くい）年
稲垣三右衛門様御支配所となり

＊天明六年（１７８６）として村方六歩（分＝以降修正）通り
榊原八兵衛様知行所となり　六分方

＊天明八年（１７８８）
御代官所内方鉄五郎様となり
これより二給となり

寛政十二年（１８００）
御代官瀧川小右衛門様御支配所となり　四分方

享和三年（１８０３）
御代官鈴木伝一郎様となり　四分方

文化六年（１８０９）村方四分通り
阿部駿河守領分と改む　四分方

天保三辰（１８３２）六月に阿部様引き替えとなり
御代官森覚蔵様御支配所となり　四分方
森覚蔵様、村方四分　御支配所
榊原内蔵之介様、同六分　知行所

天保三辰（１８３２）七月日（作成日）

（以降追加後筆）
天保五午年（１８３４）秋、森覚蔵様御引き替え　四分通り
水野美濃守様御知行所となり

天保十二丑年（１８４１）
朝倉外記御支配所と成る　四分方

同　十三年（１８４２）
御代官所篠田藤四郎支配所と成る　四分方

同　十四年（１８４３）
御代官勝田次郎支配と成る　四分方

天保十四年卯六月、御改政につき
榊原主斗様御知行所、村方六分どおり
御上地に成られ、この年まで天明六午年より二十八年めに
て引き替わる。八月みなやめになる

同十七年（１７４６）春　四分方
高木清右衛門御代官所に成る

弘化三年（１８４６）午正月
御代官岩田鍬三郎支配所　村方四分
榊原主斗様　村方六分

（年号無記＝慶応四年七月旧幕最終時点）
中野播磨守知行所　村方四分
榊原岩五郎　村六分

慶応二（四）年（１８６８）辰七月吉日
御一新につき
知県事柴山文平様御支配に相成る

同年
水野出羽守様御支配所に相成る

＊印＝原本は順番誤記、前後記しにしたがって差し替えた
解読（未定稿）＝市原の古文書研究会

市原市文化財研究会

現地研修会

会長・小川八起

平成９年「歴史を訪ねて研修会」＝飯香岡八幡宮奉納絵馬

平成１９年「村田川に沿う文化遺産を訪ねる＝菊間地区

令和４年　補遺

八幡史学館

高島一本橋について

上総高島　弥久兵衛
近藤義彰

平成２０年ころ

八幡史学館チーム

高島一本橋について

上総高島　弥久兵衛　近藤義彰

高島一本橋について

上総高島　弥久兵衛　近藤義彰

時代劇ふうに自営の我が家を紹介すると、「揮発油販売を生業とする拙宅は、茂原街道を挟んで住ま居が上総国市原郡　店屋は下総国千葉郡にて御座る」ということになる。

現在の正式な住所は市原市古市場、店舗所在地は千葉市緑区古市場町である。私が子供のころ、市原側は市原郡菊間村古市場、千葉側は昭和中期ごろまで千葉郡下古市場村とよんでいた記憶がある。とくに市原側は千葉側と区別す

るため「上古市場」または「高島」とも称したとの伝えが上総国町村誌に記録それているという。茂原街道を挟んで存在する「古市場」の地名は、古来、村田川の舟運が盛んで市場が開かれていたことにちなむと考えられている。私の少年時代、古市場は日常「高島」と呼んでいた。今でも居住地内外のお年寄の中にときどき「高島」と言ったり、「高島部落」と言う人がいる。この高島に川が流れていた。

両岸は竹藪が覆い被さり、その曲りくねりの川が「村田川」だった。市原市の北東部の隅、金剛地に源を発し、北流して千葉市に入り、同市緑区大木戸町地区で方向を西に転じ、再び市原市に入り高田地区を通過、草刈、古市場地区を経て八幡海岸地先の埋立地から東京湾に注ぐ全長20・

8㎞の川である。曲がり、くねりの激しい個所を地元の人は「しなんなり」と言って、水深が強く危険度が高かったので人は近寄らなかった。とくに村田川は大雨が降るたびに氾濫して、両古市場地区では床上浸水、床下浸水、田畑冠水の被害を受けた家々が多くあった。県道も水没して1m位の深さになる所もあり、道路上を舟で通行したこともあった。私の家も池のコイが全部さらわれたこともあった。こんな状態だったので河川改修工事が行なわれて、今ではすっかり氾濫の被害は無くなった。　現在の村田町周辺では、上総、下総、二国の境界だったので境川ともいわれていたが、古市場では、（浜野～茂原間の千葉茂原線）のアスファルト上に敷かれた白線のセンターラインが、上総、

下総の分岐線になっている。かつて、この村田川に杉の大木をタテ割り真二つにして片方を横に寝かせて橋にした所があった。高島の集落に架けられたので地元の人は「高島一本橋」と名付けた。水面から橋までの空間の高さは約7mほど、両岸までの長さは12m位、橋もとは太くて安心だが先に行くほど細くなり、渡るのに大変怖い思いをした。少年時代の懐しさをそそる橋だった。高島一本橋の架かる道について古い文献で調べたことがあり、すこぶる驚いた。市原、古市場は千葉茂原線の主要地方道を堺にして千葉、古市場とともに水田と住宅が混在しているという地域形成だが、高島一本橋を渡る道筋が、市原の鎌倉街道であったことを知って認識を新たにしたのである。うれしいショッ

クだった。この鎌倉街道を昔の旅人が往来した。この道は安房国、国分寺（館山市国分）を発し、上総国、国分寺（市原市惣社）を経て高島一本橋を通過して下総に入り、大巌寺（千葉市）、千葉寺（同）から下総国、国分寺（市川市国分）、そして武蔵国江戸を通って相模国鎌倉へ……徒（かち）で行く旅人が一本橋を渡る情景が浮かび、言い知れぬ気分を味わうことが出来た。

もう一つの驚きは高島にある二つの神社。治承二年戊戌（一一七八・平安後期の藤原時代）創達の「天神社」「八坂神社」の二社がある。治承二年というと当時の武将、平清盛（一一一八〈元永1〉～一一八一〈養和1〉）が後白河法皇を幽閉して〝治承のクーデター〟（法皇の平氏封じ

込めに対する報復）を起こした前の年。この治承二年に千葉氏の臣、高島恒重が「天神社」と「八坂神社」を創建したというから「高島」の知名由来の謎が解けた気がする。

治承二年は千葉常胤（一一一八〈案永7〉～一二〇一〈建仁1〉・平安末期～鎌倉初期の父千葉常重（一〇八三〈永保3〉～一一八〇〈治承4〉）が上総国大椎城（千葉市緑区大椎町）から一下総国池田郷（同中央区亥鼻）の千葉城（猪鼻城）に移り、千葉開府してから半世紀ほど経った年。千葉開府は大治元年（一一二六）六月一日のこと。当時、常重は四十三歳、嗣子の常胤は八歳の少年だった。それから約半世紀、天神社と八坂神社が創達された。創達二年後の治承四年に常重が九十七歳で死去しているが、神

社を創達した高島恒重は常胤の家臣だったことが推察される。古市場の今は、かっての村田川を軸とした河原や流れと戯れる子供たちの情景は全く見られなくなり、高島一本橋を知る人も少なくなった。ただ一本橋の記念碑がポツンと建っているだけで、周辺には近代的な建物が軒を連ねている街に変貌した。

近藤義彰

市原市八幡・市川本店文書

A 22 B

市川石三

昭和6年～12年

八幡町雑記入り諸工事見積

新田川ハメ仕事記入

平成後期調査

市原の古文書研究会

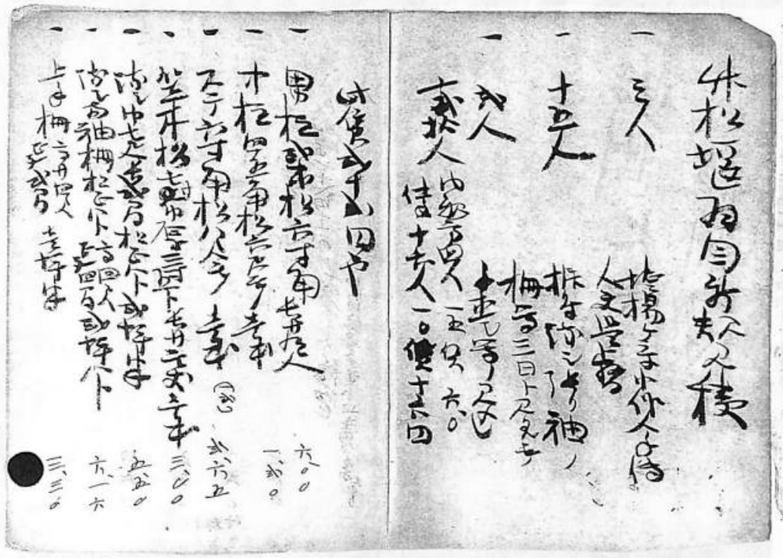
昭和6年（1931）＝市川本店文書 A228
諸工事見積り写し（市川石二メモ）

諸工事見積り記入
昭和六年四月記
雑記入見積り書写し
新田川ハメ仕事記入

①竹松堰羽目新規見積り（昭和6年）

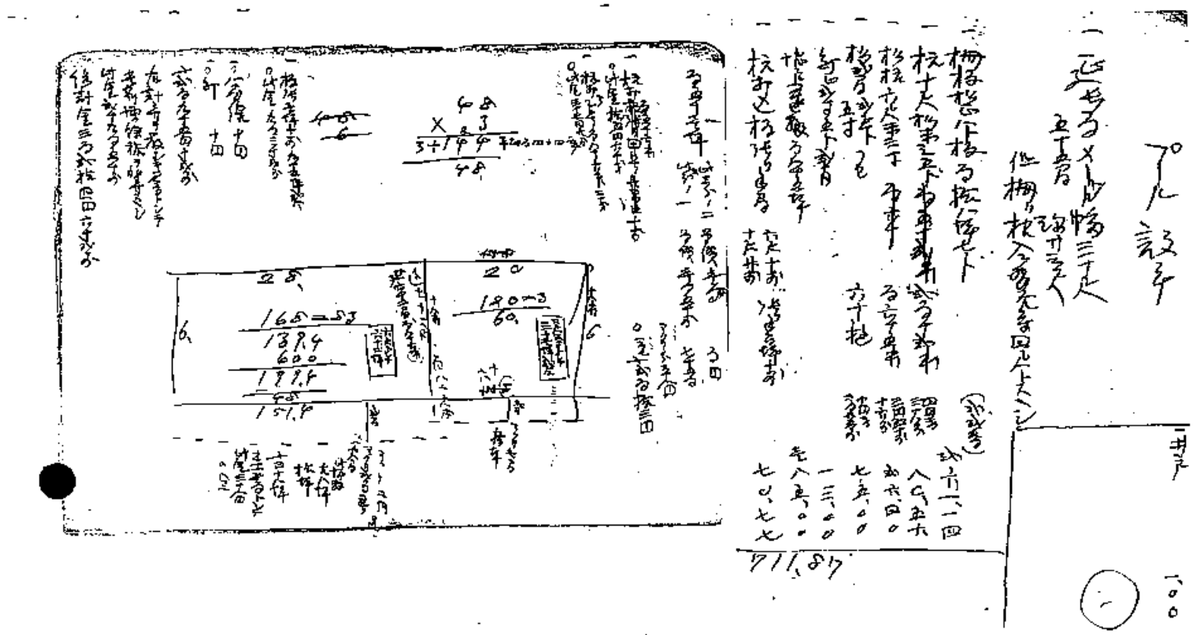
一三人　掘り揚げに付き小作人手伝い
　人夫監督
一十五人　据え付け流し張り袖の
　柵高三日と見たるもの
一二人　手直し等の見込み
〃二十人　内親方四人　一五　賃六・〇
　仕手十六人　一〇　賃十六円

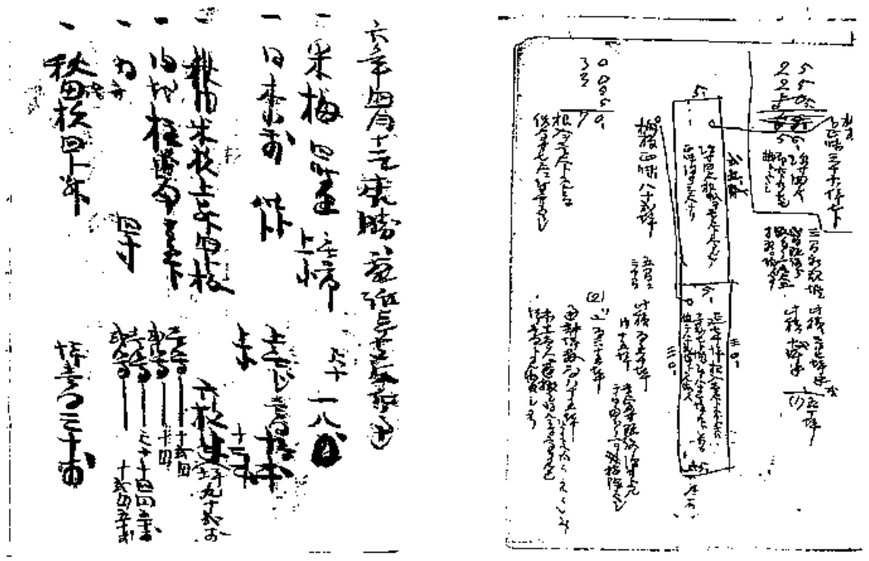
この賃二十二円なり
一男柱二本、松六寸角長さ九尺　六・〇〇
一中柱、四五角松、六尺もの一本　一・〇〇
一ステ、六寸角松、八尺もの一本（一式）　二・六五
一笠木、杉七寸巾、厚さ三寸五分、長さ一丈一本　三・〇〇
一流し、巾七尺、長二間松正八分二坪半　五・五〇
一流し両袖柵、松正八分高四尺、延べ四間、二坪八分　六・一六
一上手柵、高さ四尺、延べ二間、一坪半　三・三〇



②表題なし（うなぎ留＝昭和6年ころ）

一鰻留二た通り、中央延べ二間、深さ四尺、下深さ四尺、延べ七尺
　一か所　松正八分、二坪　四・四〇
一流し桁杉三寸角、一丈六本　四・二〇
一杉八尺杭二（寸）五分、三寸六分　二十二本　五・五〇
一下りスタ四寸五分角、杉八尺一本　一・二〇
　材料これまで四三・一一
一船大工手四人、釘代一円　七・〇〇
　合計金七十二円十一銭、外七円八十九銭予備費
　内六円予備費より支出分、予備費〃一円八十九銭余り
（図面省略＝図中文字）
　一間、二間
　予備費より支出柵および杭代
　ネバ詰め
　予備費より支出柵杭代
　この受け負い代金八十円なり
　区費より四十円、地主割合四十円、これは東やより受け取りたる由にて区長渡辺持参せられたり
五月十六日
一二十五円なり　源蔵に相渡す、ただし二十円五郎兵衛、五円□□
　十六日渡す
　外に酒一升遣わす
〃
一八十五銭　同人渡す、山木釘代、針金カスガエ代
　十六日六円なり　舟大工手間四人渡す





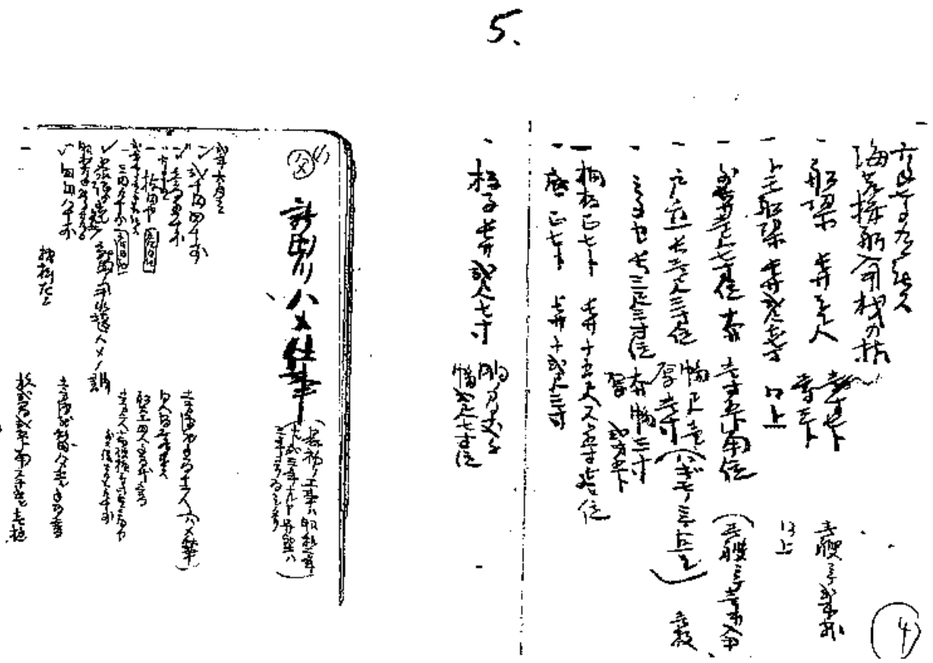
③プール設計（昭和6年）

一延べ長さ百メートル、五十五間、幅三十尺、深さ三尺
　ただし柵は根入りを要するにつき四尺とすべし
一柵板、松正八分板百十八坪七分　二二替え　二六一・一四
一杭十尺、松末三五分二百十二本　四円替え、三十八銭　八〇・五六
一松杭六尺末三寸　百六十五本　三円五十銭、十六銭　二六・四〇
一松二間、二五分、五寸フセ　六十樋　十円替え一円二十五銭　七五・〇〇
一釘正二寸五分二十目（匁）　一三・〇〇
一掘り上げ運搬百八十五坪　一八五・〇〇
一杭打ち込み板張り手間　六尺十銭、十尺二十銭、張り手間坪十銭　七〇・七七
（合計）　七一一・八七
一井戸　一・〇〇
一百五十一坪　この三分の二、単価一円　百円
　この三分の一、単価一円五十銭　七十五円
　マクリ分三十八円
　三口〃二百十六円
一杭打ち百五十六本、甲号十銭
　この金十五円六十銭
一杭打ち乙号　百八十六本、二十銭
　この金三十七円二十銭
一板張り一坪十銭、九十三坪二分
　この金九円三十銭
一八番線十円
一釘十円
　〃二百九十五円十二銭
　右計算を厳しき見方として一割増余裕を加算すべし。

この金二十九円五十銭
総計金三百二十四円六十二銭
（図面省略＝図中文字）
六十尺、十八尺、一間、二間
三尺五寸として三十一坪二合
延べ六十二間百八十六本
マクリ一間、十坪
マクリ二間通り、二十八間この坪数二十八坪、十坪
〃三十八坪
出土一円としてこの金三十八円

深さ四尺、すなわち六分六厘六毛掛けとすべし
三間新規掘り、二間既設分、四分の一一尺五寸さらに掘ること
この積三十七坪半、この積十二坪半、二口〃五十坪（1）
杭木正味三十六坪七分
深さ四尺根入を一尺と見たるもの、正味深さ三尺なり
延べ七十坪根入一尺とするときは一割七分増し、すなわち八十一坪九分となる
柵板正味八十一坪、五間、三十間
この積百五十坪、内十五坪、一尺五寸既設の深さとみてすなわち四分の一を□除すべし
同〃百三十五坪
（2）通計坪数百八十五坪
出土一人に運搬を任せるにつき高く見込み
坪一円と見なしたり根入れを一尺とするため総高さ七尺に計算すべし

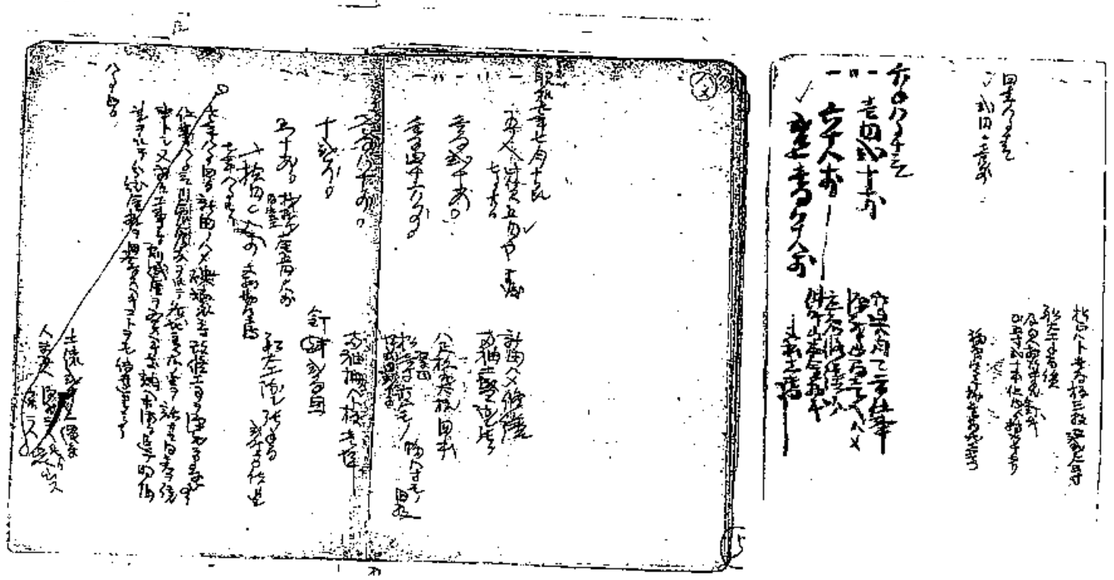
④表題なし（材料＝昭和6年）
六年四月十二日□□電話にて□□左のとおり。
一米梅　四時□　無（一？）席、上小、尺十　一八・〇



一同木小前　七分、八分、上無じ一円十本、上小十二本
一米杉上□四分板、六枚半（坪九十二銭）
一内地柱小角□五分、一等十二円、二等十円
一同　四寸、一等尺小十四円五十銭、二等十二円五十銭
一秋田杉四分□　坪一円三十銭

⑤表題なし（海苔採り船入用材＝昭和6年）
六年七月九日記す
海苔採り船入用材の槙
一船梁、長さ一尺、一寸七分、一寸三分、一艘にて二本材
一トモ船梁、長左二尺六、七寸　同上　同上
一外長さ一尺七寸くらい、大きさ幅三寸、厚さ二寸五分
一棚板正七分、長左十五尺または五寸延くらい
一底正七分、長左十二尺三寸
一板子、長さ二尺七寸胴の間だけ、幅二尺七寸くらい

⑥新田川ハメ仕事（昭和7年）
最初の工事は昭和二年なるや三年なるや、開墾は三年よりなしたり
二年六月三日　土方源蔵手間十二人（ハメ仕事）
一二十円四十銭
〃
一一円五十銭　同人酒一升遣わす
〃　六月十五日
一十円なり（雇日記）　船大工四人手間代立て替え
〃　七月六日書き取り記す
一三円九十銭（雇日記）土方二人〆切り破損につきこの金三円なり
外土俵支払い九十銭
受け取り証より出したるもの、新田の用水堰ハメの調べ
昭和六年五月二十九日



一四円八十銭　土方源蔵新田ハメ直し手間立て替え
材料左に
杉二間二五分角ステ遣い一樋
杉正八分一間板三枚延べ二尺三寸
船大工手間賃および同人持ち行きたる釘代
正五寸二十本ただし内より持ち行きたり
同年八月十三日
一二円〇一銭　福島定平払い金物立て替え
六年八月十三日
一一円二十銭　六年六月土方仕事
源蔵手間一人ハメ□□修繕分
〃
一六十八銭　仲町山本金物代
二口〆一円八十八銭　支払い立て替え分
昭和七年七月十日ころ
一五人この賃五円なり相渡す　新田ハメ修繕
七月二十日　両袖土盛流し張り
〃
一一円二十銭　八尺杉丸太杭四本
〃
一一円四十六銭　厚正、松一寸六尺もの、幅八寸もの四枚
〃
一一円八十銭　両袖柵八分板一坪、坪二円二十銭
一十二銭　釘二百目
〃
一五十銭　材料代および船大工　〆金五円〇八銭
船大工流し張り手間、二時間くらいの由
〆十円〇八銭　支払い勘定のため
七年八月九日

土俵二十〆縄付き、
人夫五人、深代三人、山木二人、これより先へ出す
七年八月四日新田のハメ破壊につき改修工事を源蔵に申し付けたり。
ただし来る八月三日川倉倉吉をもって各地主へ右の由を話させ、同意を得る事とし、また前々工事につき割賦金を右方へなすべきところ調べ、未済につき追って明細書をもって分納金右を回付すべきことをも伝達せしめたり

八月四日

一土台、赤松四寸角	一	一・六〇	一・六〇
一柱杉、八尺五寸三五角	三	八五	二・五五
一母屋棟木束とも杉十三尺三寸	一	八〇	八〇
一たる木、杉九尺二寸角	六	二〇	一・二〇
一通し横広小前、屋根用杉二間大横	八	一八	一・二四
一窓敷居、松六尺ならび	二	四五	九〇
一同七尺	一	五〇	五〇
一腰羽目板、下見とも杉四分、上升四坪		一・〇五	四・二〇
一床板、松六分　四枚半		二〇	九〇
一根太、杉三尺五寸　一寸八分各八		一五	一・二〇
一地引き、杉一尺三寸	一	八〇	八〇
一亜鉛板、三〇八尺	二	八五	一・七〇
一同平板、三番三六	一	七五	七五
一切石、大谷八寸角	三	二〇	六〇
一左官手間、半人		七〇	七〇
一アキ残、半人		七〇	七〇
一大工手間、七人		一・五〇	一〇・五〇
一口釘		五〇	五〇
一窓硝子、障子　高丸形三尺七寸、横幅三尺三枚		二・一〇	六・三〇

〆三十七円六十四銭

前受け負い中見積もり材料と手間十七円〇六銭
二口〆五十四円七十銭
このところ前請負分代金中入れとす。
内十七円〇六銭
総〆三十七円六十四銭　大塚芳社中
〆六年八月十六日

荒川為太夫
ニューム釜相場
六年六月二十九日回答
（アルミ釜寸法省略）

⑦八幡神社鳥居先水門（昭和7年）

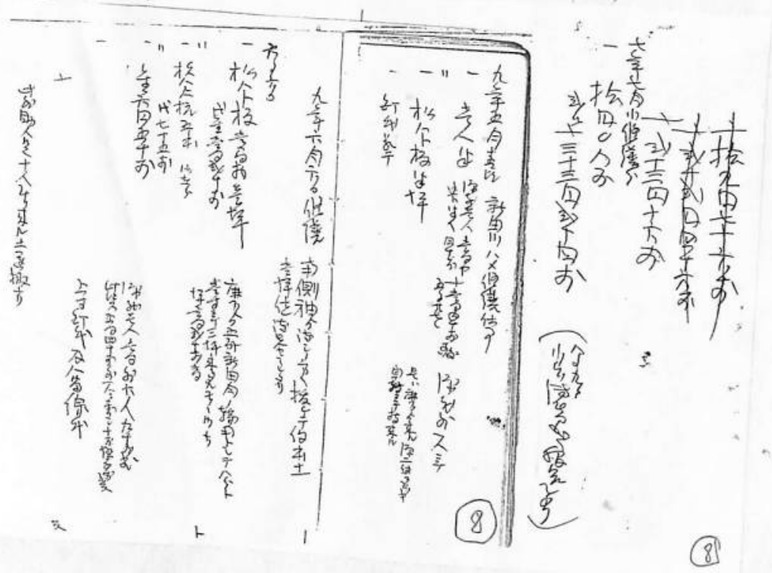
ハメ受け負い控え、土方源蔵と□七五三	
受け負い金十円なり	
一松五寸角、長さ五尺二本	代六円
一笠木、一本	代一円
一鰻留め板、松立て坪（二尺ものにて）	代二円
一流し半坪	代一円
一ハメ板	代五十銭
	〆六円五十銭
手間土方四人	代四円くらい
船大工	代二円くらい
	〆十二・五〇
一流しの下三尺ものにて二間一坪	代二円
一流しの両側と水下留め尺□　七分	代□□四十銭
	総〆一六・〇
一四尺杭、十二本	一円
一六尺、十二本	一円八十銭
一ステ六寸角	二円

⑧表題なし（新田堰ハメ修繕＝昭和7年）

七年八月新田堰羽目修繕につき川島倉吉をもって
各地主に相談じて改修をなしたる。かつ前々新設の時より
設修をなしたるもの又は修繕をなしたる明細を示して小出伝蔵氏
に割付を依頼すと事を話さしめたり。七年八月三日記す

八月四日
一仮留め付き土俵、二十俵　代一円
一人夫六人、源蔵方より四人、この賃三円七十銭、源蔵一円、別人夫九十銭、山木口住人夫二人、六十銭宛、この賃一円二十銭渡す
八月五日
一杉ウラ板一間もの一坪　代一円八十銭
一正二寸五分釘、五百目　代三十銭
一松ドブ正七分、半坪　代九十銭
一杉九尺杭、二本、末三五　代六十六銭
五十六円三十六銭、八月九日市川本店払い
一口俵十俵　代五十銭
〃六日
一松ドブ正七分板、一間もの四尺　代一円二十銭
〃五日
一六人、二人山木この賃一円二十銭、四人源蔵側この賃三円七十銭
〃六日
一四人、源蔵外三人　この賃三円七十銭
〃七日
一三人、源蔵外二人　この賃二円八十銭
一六寸カスカエ二口の代四十銭、福島より源蔵にて買い受く由
源蔵分〃十四円四十銭相渡す
八月九日
一亜鉛針金十銭　右同上

九年六月九日
一一円八十銭　作事方二人
一一円なり　源蔵一人
十日
一一円八十銭　作事方二人
一一円なり　源蔵一人
十二日
一五十銭なり　源蔵半人
〃
一四十五銭　作事方半人
計〃六円五十五銭なり、六月十二日支払い
〃
松八分五寸、長さ九尺もの三丁
一〃
松六尺、
一〃
釘および粘土
六月六日
一一円十銭　山本払い、針金代一貫六百匁
六月三十日支払い
九年七月中（九年八月十五日払い）
一九十銭　土方手間一人新田川ハメ南側修繕手間賃
八月十五日払い
一一円八十銭、　九年八月五日仕事、同人払い
北側破損修繕のため、
源蔵一人一円、外二人一円八十銭
〃三円七十銭□□事
〃



⑨新田川ハメ修繕仕事（昭和9年）

九年五月十五日ころ

一一人半、源蔵一人一円なり、手下半人四十銭、〃一円五十銭相渡す、源蔵外一人にて五月二十七日

一松八分板半坪、これは麻部より来る源二使いに行き自転にて持ち来る

一釘代若干

⑩ハメ修繕（昭和9年）

九年六月六日修繕南側袖より流れの方へ抜けて□出、本土一坪くらい流失せられたり

六月六日

一松八分板一間物一坪　麻部より五所新田月の輪用として八分と一寸にて三坪来たりたるものの内地坪一円二十銭替え

〃　代金一円二十銭

一杉八尺杭五本、内在る分、坪一円二十銭替え

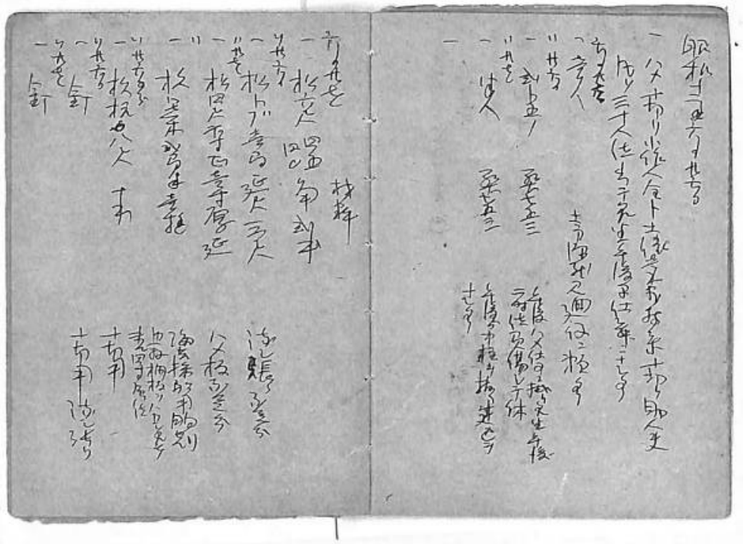
〃　代七十五銭

一金六円五十銭　源蔵一人一円外六人九十銭出す

この賃五円四十銭、外一人に□□十銭、□手前遣わす、五寸釘代および八番線代

〃

この外助人足十人ばかり来る、土運搬なり。



昭和十二年六月二十六日

一ハメ〃切り小作人全部土俵一人前持参、〃切り助人夫およそ三十人くらい出でたる由、午後早仕舞いになしたり

六月二十六日

一一人　土方源蔵、見回り役に頼みたり

〃二十六日

一二分五厘　竪七五三、午後ハメ仕事にかかりたる由午後二時くらい負傷して休み

〃二十七日

一半人　竪七五三、午後より中柱を抜く建てこみをなしたり

六月二十七日材料

一松六尺、四五、四〇角、二本

〃二十六日

一松ドブ一間、延べ尺三尺　流しに張り不足分

〃二十七日

一松四尺六寸、正一寸厚さ延べ　ハメ板不足分

一杉□木二間半一挺　海苔取り船用胴割り幅一枚柵板をはがしたるもの来る、四寸強くらい

〃二十六日分

一杉杭八尺、十本　末で四寸強くらい、〃切り用

〃　〃切り用流し張り

一釘

〃二十七日

一釘

十二年九月中

堰羽目の笠木等を取り毀ち、羽目板を流したる等不法の働きをなしたるものあり、折からの高潮にて新田へ潮入りたる由にて淡水を入れる必要あるとみて修繕をなしたり。

一松正一寸羽目板長さ四尺、幅六尺

一釘

一船大工手間一人　一人にて出来せざる山木せざるや

昭和９年

「千葉県八幡町梗概」

飯香岡八幡宮　御神徳略記

千葉県八幡町商工庶家案内

市川蔵

平成２０年ころ

八幡史学館

千葉縣八幡町便概

省線八幡宿駅は両國駅より三十九哩二分（一時間三十四分）千葉駅より三百にて内湾に臨み遠浅にして海水浴場也

又廣大なるグランドと男女別のプールを設け物價低廉人情敦厚にして理想の避暑避寒地たり

又驛前より本町通りに商賣行を進へ殷賑を極む

○當町には縣社飯香岡八幡神社あり無量寺境内には千葉常胤の墓あり物産には乾海苔醤油等を主とす

飯香岡八幡宮 由緒略記

飯香岡八幡宮は人皇四十六代孝謙天皇の御宇天平寶字三年六月勅命を以て鄰國降伏を祈願の為め上総國放生の池に畏くも養田別尊の神靈を齋ひまつらせ國府八幡宮と稱（まつれり）かくもめでたくまします御上に此岡の鎮社をも並び奉る國内の諸神も命せ給ひければ郡廷に於ても當八幡大神をも他にまさりて深く

○こは往古天平寶字三年六月此國に此神社を創て遷てまつりし時季満卿勅使に渡らせ給ひ自銀杏樹を植て詠給ひし歌

君のおけふ植そめし銀杏樹にいくとしかへりやどるらむ

（但し周囲三十五尺余）

○往古より釘付の松と稱し境内の南端にあり周囲十五尺方余の古松にして太銀杏樹を共に世に知らる

○往一位勲一等建通公の歌に

影山非のあてにし飯香岡
忘れをかけて世にはふりけり

此外あまたの碑ありと者ふく

○後四十二年九月三十日陸軍省より本社に軍納の戦利品

二十二糎七榴加農砲　一門
臭形れ雷　一箇
三十糎七榴加農砲　一門

同大砲は三十七八年戦役に旅順要塞背面砲台に備付け花崎山侍る山嶺の砲

千葉縣八幡町商工廣家案内

報知新聞專賣所

乾海苔麵類製造 石井彌吉 電話十九番

精光堂時計店 電話七番 西洋料理 アサヒ食堂

和洋支那料理味芳亭 電話二九

海水浴 割烹旅館 白鳥 電話十五番

汐干狩

カフエー白鳥支店

株式會社第九十八銀行八幡支店

織田自轉車店 電話四十七番

小林齒科醫院

浅野齒科醫院 電話四三番

寺嶋醫院

渡邊醫院

倉本病院 院長 大河内武

表具師 八木香墨堂

株式會社千葉商銀行八幡出張所

醤油味噌製造業 小川商店 電話二〇番

米穀肥料酒類醤油 佐倉商店 電話二十一番

惣 今井屋呉服店

米菓製造所 杉山傳三

海水浴 房総線八幡宿

丸山寫真館

かくもめでたくまことにますゝ上に此國の鎮社をも建立まつり國内の諸神をも合せ祭りければ朝廷に於ても

当八幡大神をも他にまさりて深く信崇致ありせられ國守親王をはじめ嚴重にみまつりを行せられしは世にたぐいなき事にていはまくも更に數しらぬ御ゆかりなりける縁となる

ほ神靈は文武二宸を守護り賜ひけれど我が國民誰か恩德を蒙らざるものあらむかくも大稜威の顯なるまゝ源頼光 源頼義 源義家 源頼朝 千葉常胤 足利義満 足利義政 足利義昭 德川家康の諸公に於ても信仰淺からず思召され事ある毎に祈願をかけ給ひ德を蒙りたるき（なほ冥加報賽

元祿二年辰月社復興

寛永六年酉年八月再復

明治三十四年三月三版

明治三十七年三月四版

明治四十年三月五版

明治四十年十一月六版

明治四十一年一月七版

明治四十一年三月八版

明治四十一年十一月九版

大正十三年十五月十版

同火砲は三十七八年戰役に於て頓兵塞背面砲台に備へ付け花

專ら松樹山・椅子山・星星の間

に於ても

岡府 飯香岡八幡宮社誌

同火砲は三十七八年戰役に於て頓兵塞背面砲台に備へ付け花專ら松樹山・椅子山・星星の間に於ても

岡府 飯香岡八幡宮社誌

織田自轉車店 電話四十七番

海水浴 御料理宴 汐干狩 内外物産店 房総線八幡宿 電話廿二番

米穀肥料商 青木義次郎 電五五 椎野のせき 鼠の薬 りん病消滅 かつけ薬

山下書店

内外雜貨肥料商 岩田万吉 電八八

酒醤油荒物白米 コークス薪炭商 金宮原勝次 精米所 電話八幡八番

食堂 モナミ

米穀薪炭 加喜屋号 乾物菓子 金植草商店

書籍文房具 化粧品雜貨 御小賣 好文堂本店 小出德次郎

和洋文食堂 きみづか

醬油味噌醸造 陣屋 太印 鈴木敬介商店 電話八幡三四番 振替東京一七八三番

鮮魚 仕出し 氷問屋 魚虎商店 電話五十六番

岡田呉服店

宇野澤酒店 電話四六番

ラヂオ 蓄音器 宮吉自轉車店

丸山寫真館

米穀 製造所 杉傳三

袖ヶ浦名産 佃煮製造 舎吉岡商店

材木商 白鳥孝治 電話十二番

汐干狩 釣舟 案内 名物 雜貨販賣 松屋食堂 電話十三番

荒物乾物 漆器畳表 中店 市川吉次郎 電話十六番

精米薪炭味噌 鈴木常太郎 電話二四

藤田屋履物店

糊製造販賣 川上精米所

昭和九年十二月十五日印刷 同年同月二十八日發行 編輯兼發行人 千葉縣松戸町三丁目一四二五番地 松井信太郎 定價金十錢

市川海

昭和35年

南総町 町勢便覧

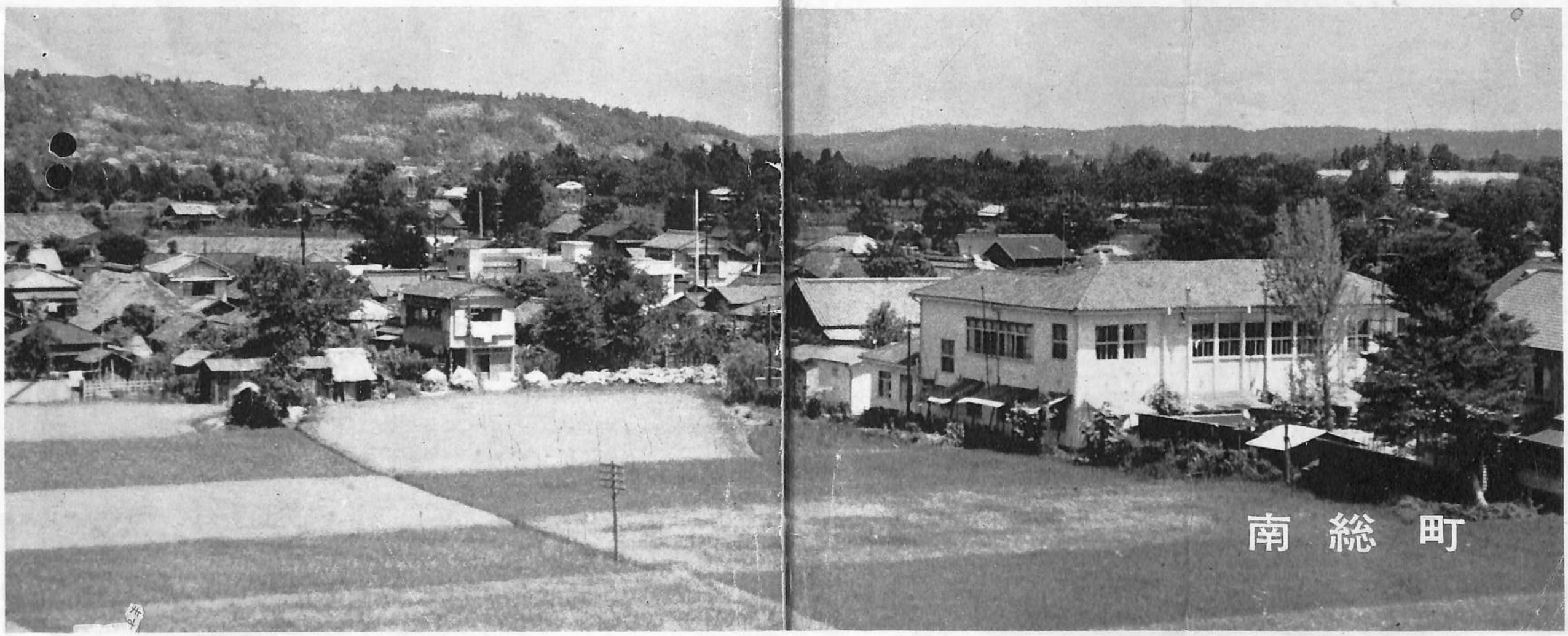
市原市藪　塚原 茂所蔵

令和4年　補遺

八幡史学館

町勢要覧

1960年



—目　次—

沿革 …… 4
位置及び地形 …… 5
人口 …… 6
町機構及び機関 …… 11
財政 …… 15
産業・経済 …… 20
教育・文化 …… 29
厚生・福祉 …… 33
治安・消防 …… 38
水道・土木 …… 43
選挙 …… 45
観光・史蹟 …… 47

町勢要覧刊行にあたりて

南総町長　鶴　岡　民　夫

南総町も既に合併以来６ヶ年余を経過し、この間町の重要施策である所の新農村建設、新町建設計画を始めとし、新しい町づくりも着々とその成果を挙げて参りました。

思えば合併当時尨大なる赤字財政を抱え本町の前進は極めて憂慮される状態にありましたが、町民各位の御理解と御協力のもとに、僅か１年余にして赤字財政を克服し、南総町の将来への発展の礎はきづかれました。

この間新町建設の実績が認められ、昭和33年11月に全国優良町村として総理大臣の表彰の栄に浴した事は、町民各位と共に御同慶に堪えない次第であります。

今回、国勢調査、世界農林業センサス等行財政に重要なる各種統計調査が行われた機会に、本町の概要を紹介し、周知して頂くために町勢要覧を編集いたしました。本書により各位の御参考になれば望外の喜びとする所であります。

昭和３６年３月

沿　革

明治４年の廃藩置県により、同年千葉県所管に夫々属し、明治22年４月１日町村制実施により、平三村、鶴舞町、内田村、牛久町、戸田村と、各々自治体を組織し、爾来、明治、大正、昭和と市原郡中南部に位して発展して来たが、古くから人情、風俗、習慣を同じくし、主産業が何れも農業であり、共通の利害関係を有していたところから町村合併促進法の施行を機に合併の気運熟するや将来の大理想郷建設のため、二町三村が玆に合併し、昭和29年11月15日新たに南総町として発足し今日に至る。

位置及び地形

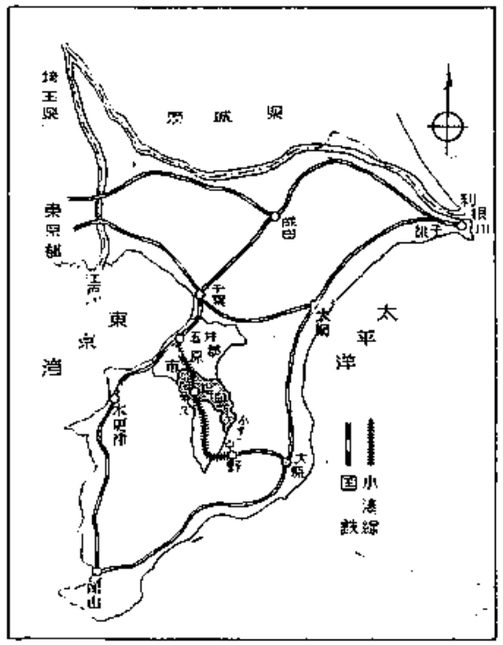
位　置

本町は県都を離れること28,7粁にして、市原郡南部に位置し、東は長生郡長柄町、長南町に、西、北は三和町、姉ヶ崎町、君津郡富来田町、平川町に南は加茂村及び夷隅郡大多喜町に接する。

位　置	役場所在地　千葉県市原郡南総町牛久134	
	東経　140° 8′ 25″	北緯　(35°) 23′ 42″
面　積	78,94KM²	(県下14位)

地　形

本町の地形は東西9.25粁、南北19.75粁の変則矩形を為し、河川は町の中央を南北に走る養老川の清流を挟み両岸一帯は豊穣な土地を有す。地勢は南高北低にして、標高は低地に於て、海抜10米、最高は205米である。



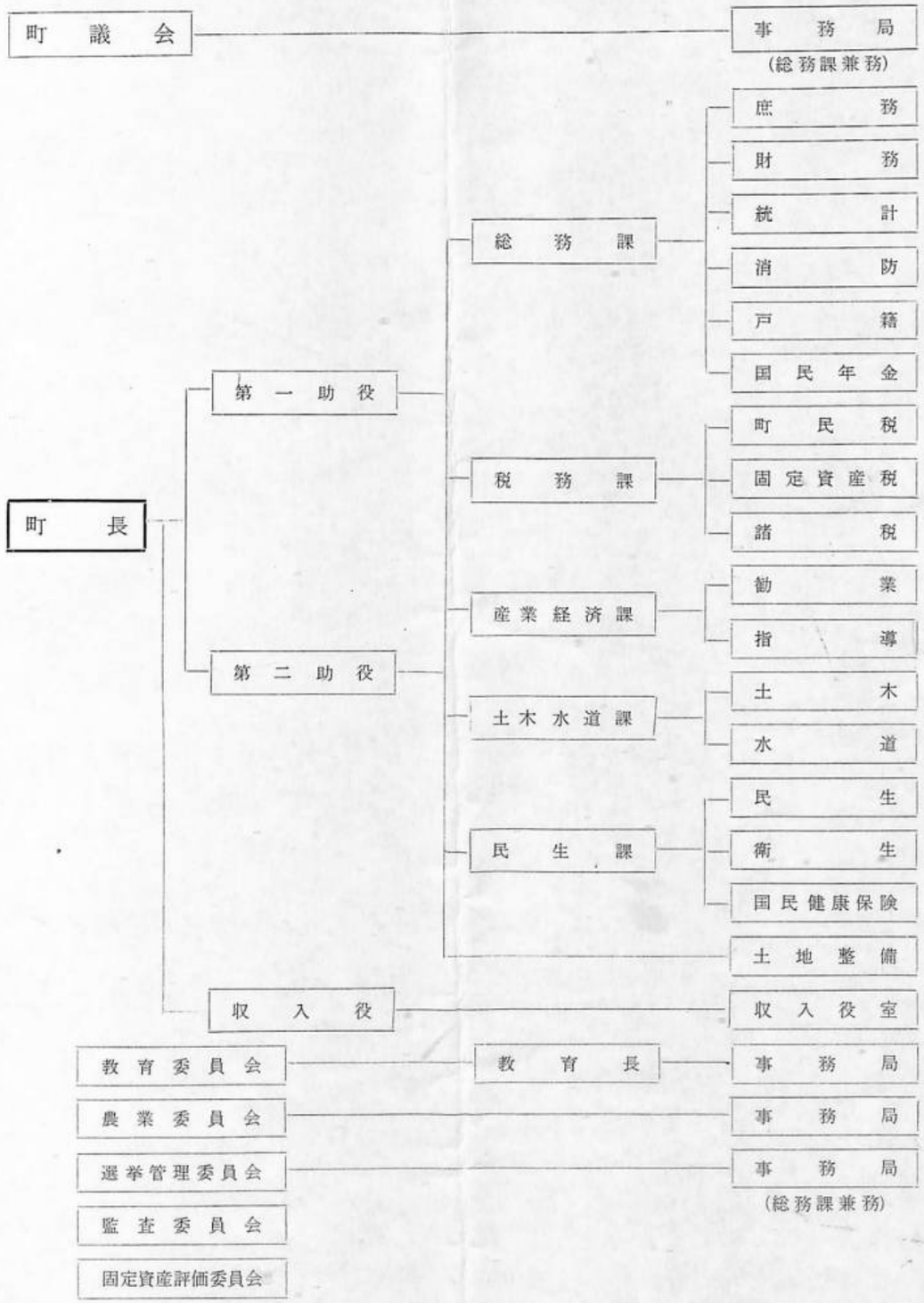
町長 鶴岡民夫

助役 金子禎一

助役 本吉三郎

収入役 岩瀬 滋

南総町機構及び機関



商　工　業

牛久市街地

鶴舞市街地

産業別事業所及従業者数

(昭和35年6月1日現在)

区分＼産業分類	建設業	製造業	卸小売業	金融及保険	不動産	運輸通信業	電気・ガス・水道	サービス	合計
事業所数	86	39	282	3	1	9	1	165	586
従業者数	250	163	725	41	1	66	3	672	1,921
常雇者数	84	76	240	20	1	48	3	446	918

産業中分類別法人個人別商店数

(昭和33年商業統計より)

販売品目	法人経営	個人経営	従業者数	商品販売額
総数	37	199	629	622,015千円
一般卸売	8	11		
代理・仲立		3		
衣服・身まわり品	3	20		
飲食料品	11	87		
飲食店	2	19		
自転車・荷車		12		
家具・建具	7	17		
その他小売	6	30		

工業従業者別事業所数

(総務課)

年別	従業者別	事業所数	従業者数	製造品出荷額
33	3人以下	9	17	4,017千円
	4人以上	7	103	52,414
34	3人以下	11	25	9,887
	4人以上	8	99	49,734

金融機関

名称	所在地
千葉銀行牛久支店	南総町牛久1,223番地
千葉信用金庫牛久支店	南総町牛久1,277番地

産業別就業者

(30国調)　(15才以上)

		男	女	世帯数
第一次産業	農	3,508	3,721	2,264戸
	林	12	4	8
	漁	0	0	0
第二次産業	鉱	0	0	0
	建設	194	3	100
	製造	220	80	138
第三次産業	卸小売	431	328	326
	金融不動	28	15	19
	運輸通信	149	30	97
	サービス	320	327	220
	公務	127	17	98
	例不能	0	0	0
				世帯主完全失業 23
				世帯主非労働者 230

商総町中央公民館

南総町図書館

牛久小学校

鶴舞中学校

戸田中学校

小　学　校

(昭和35年10月現在)

学校名	教職員数	学級数	児童数 男	児童数 女	児童数 計	校舎面積	所在地
戸田小学校	16	13	273	240	513	470	馬立 830
寺谷分校	4	4	47	42	89	107	寺谷
牛久小学校	24	19	419	390	809	680	皆吉 936
内田小学校	10	8	147	136	283	316	宿 174の1
鶴舞小学校	16	13	251	240	491	400	鶴舞 703
平三小学校	12	10	176	162	338	374	平蔵 808
合計	82	67	1,313	1,210	2,523	2,347	

中　学　校

学校名	教職員数	学級数	生徒数 男	生徒数 女	生徒数 計	校舎面積	所在地
戸田中学校	12	7	147	135	282	253	馬立 831
牛久中学校	15	9	192	193	385	432	牛久 500
内田中学校	8	4	74	62	136	185	島田 50
鶴舞中学校	10	6	111	128	239	261	鶴舞 33
平三中学校	9	5	83	63	146	249	平蔵 808
合計	54	31	607	581	1,188	1,380	

高　等　学　校

学校名	教職員数	学級数	生徒数 男	生徒数 女	生徒数 計	校舎面積	所在地
県立 市原高等学校	37	12	366	200	566	1,112	牛久 651
鶴舞高等学校	37	10	163	218	381	1,441	鶴舞 355 江子田 1,160
合計	74	22	529	418	947	2,553	

(注　鶴舞高等学校は雪沢分校の生徒を含む)

治安・消防

南総警察署

警　察

南総警察署は市原南部の広大な地域を受け持つて、治安に萬全を期している。又、消防施設も近時著しく充実し機能を充分発揮して、町民の信頼を得ている。

警察陣容

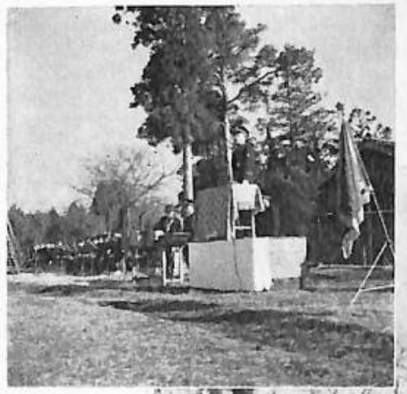
(警察署調べ)

区別	年次	昭和33年	昭和34年	昭和35年
警察署	本署	1	1	1
	派出所	1	1	1
	駐在所	9	8	8
警察官	総数	29	27	28
	警視	—	—	1
	警部	1	1	1
	警部補	1	1	1
	巡査部長	5	5	4
	巡査	17	15	15
	その他	5	5	6

犯罪発生・検挙状況

(資料警察署調べ)

年別 / 罪名	昭和33年 発生件数	昭和33年 検挙件数	昭和34年 発生件数	昭和34年 検挙件数	昭和35年 発生件数	昭和35年 検挙件数
総数	227件	162件	146件	89件	400件	204件
窃盗	123	62	76	29	99	67
強盗	3	3	1	1	6	6
殺人	—	—	1	1	2	2
詐欺	18	16	2	2	28	25
横領	1	1	—	—	4	4
傷害	32	32	13	13	22	22
その他	50	48	53	43	73	78



消　　防

消　防　機　能

支　団	分団数	消防員数		消防機械		
		本部員	団　員	ポンプ自動車	可搬式動力ポンプ	そ の 他
本　部		18人	10	1台		
1	5		153		6台	
2	6		175	2	8	1
3	6		152		6	
4	6		158		6	
5	11		289	1	11	
計	34	18	937	4	37	1

交　通・通　信

小湊鉄道に上総牛久、馬立、上総鶴舞駅を擁し、市原南部の農産物の集荷地として重要な位置を占め、又道路は町を縦貫する県道千葉勝浦線を基幹線として発達し、バス路線も上総牛久駅より千葉大多喜の中継、茂原加茂村の湯原行、上総鶴舞駅より茂原行、町内平蔵より茂原行の小湊バスの夫々発着駅として頻発している。

町内各駅年間延乗降客数

(駅統計より)

駅名＼年次	昭和33年	昭和34年	昭和35年
馬　立		295,087人	343,599人
上総牛久	564,361人	619,187	583,083
上総川間			
上総鶴舞		146,900	

(注、川間駅は無人駅に付調査不可)

運搬、乗物種類別台数

(交通協会調べ)

年次＼種別	トラック	ハイヤー	三輪車	その他四輪車	オートバイ
昭和34年	19	36	30	38	372
〃 35年	19	36	35	44	622

郵　　便

特定集配局	特定無集配局
2	2

郵便物受付件数

(局調べ)

年次＼種別	普通郵便		書留		小包、その他	
			差立	到着	差立	到着
昭和31年			6,625	13,254	1,834	6,598
〃 32年			6,702	13,424	2,111	7,305
〃 33年			7,253	13,751	2,344	8,201
〃 34年			7,547	15,051	2,368	8,335

各種選挙投票状況

区分	執行年月日	有権者数			投票者数			投票率
		男	女	計	男	女	計	
町議会議員選挙	34. 3. 25	5,207人	5,274人	10,981人	4,763人	5,166人	9,929人	90.4%
参議員議員選挙	34. 6. 2	5,141	5,720	10,861	4,287	4,382	8,669	79.8
衆議院議員選挙	35. 11. 20	5,057	5,735	10,792	4,553	4,939	9,492	88.0
参議院補欠選挙	35. 12. 1	5,065	5,733	10,798	3,908	4,209	8,117	75.2

観光・史蹟

花の鶴舞

こゝはもと井上河内守の所領六万石の城下町として発展した。桜は大正二年御大典記念事業として植樹され、その数三千本で陽春四月となれば街は両側の桜によつて一望花のトンネルを形成しその風景は、関東随一といわれる。煙火大会、不動尊花まつり等の多彩な催しでにぎわう。

動物園

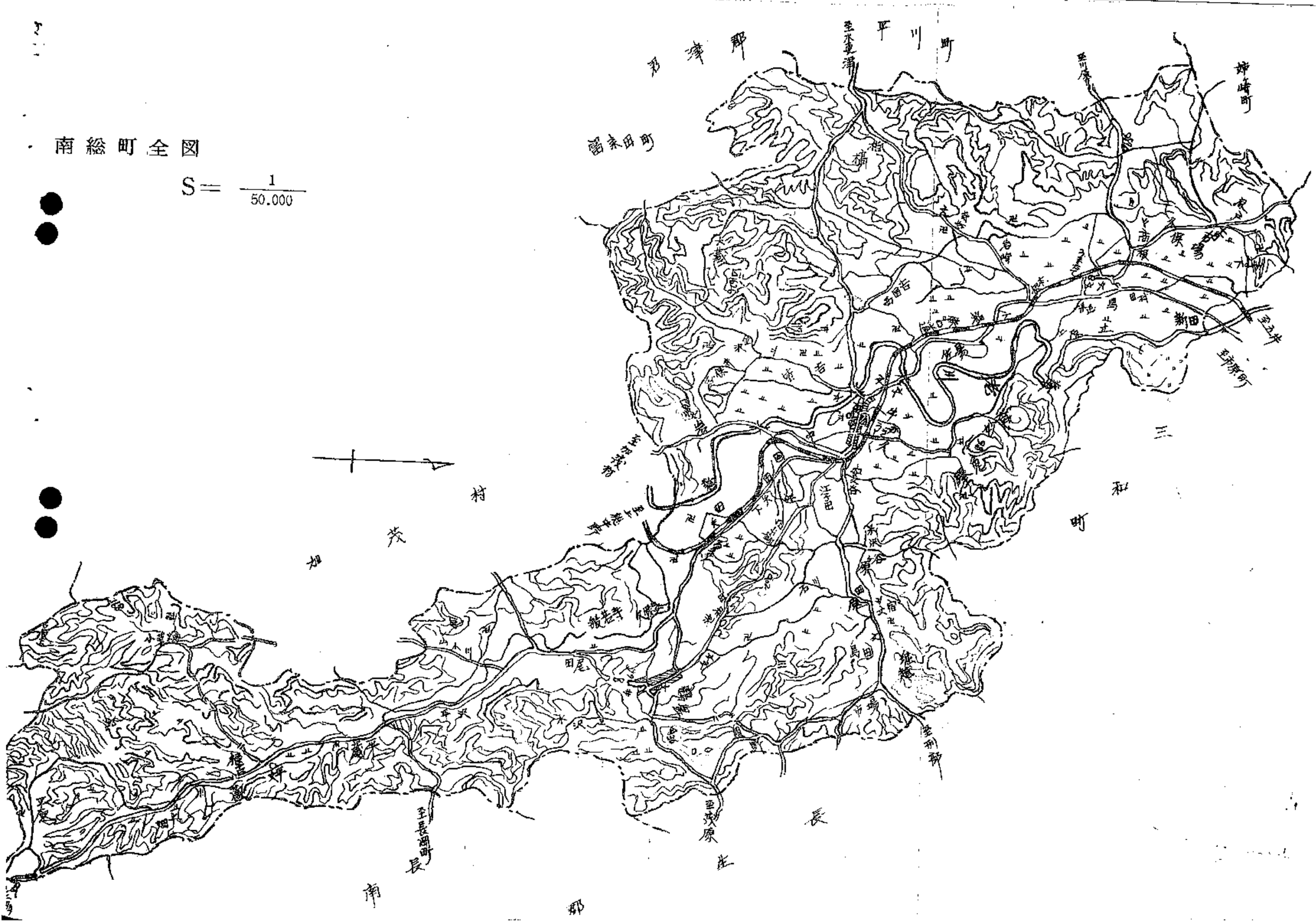
花の公園内にあつて、昭和20年に設置され、御子様の遊覧の場所として親しまれている。

橋山

音信山脈の皆吉につきる処で、牛久駅より南方二粁の地点で音信山ハイキングコースの門である。山上見晴台には橋禅寺、橋神社等がある。むかし日本武尊が東征のときこゝに登つて休息した処と云われる。神社の祭神は、弟橋媛命である。

南総町全図

$S = \frac{1}{50.000}$



成人式　昭和35年　南総公民館

牛久青年団・南総町演劇コンクール大会優勝記念　　南総公民館　昭和35年